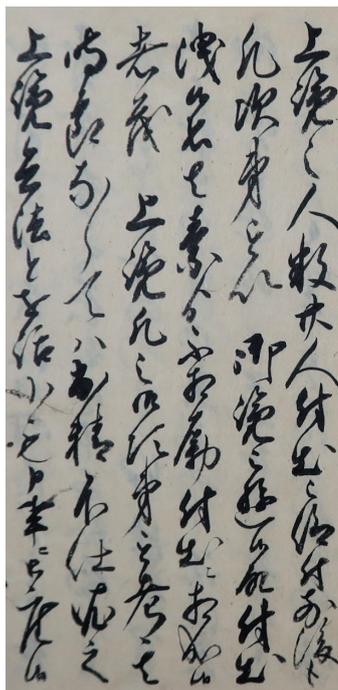


武芸・体育・  
スポーツと  
文書館資料



▶ 3

きたえる 3



上覧之人数廿人付出被仰付、前後之  
凡次第を以、御覽被遊候故、付出  
漏候者者素方不相励、付出ニ相成候  
者茂、上覧凡之御次第を考、其  
時節ならてハ出精不仕、依之  
上覧兵法と世話にも申事ニ御座候

「上覧仕法改」（毛利家文庫7格式12）

## 「上覧兵法」って、何だろう？

### 《兵法上覧》

兵法とは、辞書を引くと、①いくさの方法、戦争の方略、戦術、②剣術などの武術、と記されています。藩政期、「兵法上覧」といえば、殿様（藩主）が家臣による武術等の試技を観ることをさします。

萩藩には、「諸芸上覧年月日寄書」という記録が残っています（毛利家文庫15文武118）。安永2年（1772）2月、当職所が兵法各流派の師匠から報告させた過去の上覧実施日をまとめたものです。

これに記録された、最も古い上覧日は、貞享3年（1683）9月28日で、十文字鑑（宝藏院流）岡部半右衛門の弟子1名が召し出されたが、詳しいことはわからないとあります。

「諸事小々之控」（毛利家文庫31小々控）によると、「岡部忠右衛門・七郎右衛門・与兵衛」の三人が上覧の場に出たようです。師匠の半右衛門は書院の

次の間に控えていたと記録されています。

「諸芸上覧年月日寄書」には、召し出された人数の記載もありますが、多くは年月日が記されるのみです。

### 《上覧と藩士》

上覧は、毎年実施されたわけではありませんが、藩主の帰国後に実施されていたようです。師匠に推挙された門弟たちは、藩主の「御前」で日頃の鍛錬の成果を披露しました。晴れの舞台です。選ばれた藩士たちは気合いが入ったことでしょう。

古い時期には、1人の藩士が上覧の場に臨んでいたようですが、年代が降るにしたがって人数も増え、20人前後がその舞台に立つようになりました。

藩主上覧は、家臣を熱心に稽古へ取り組ませることが一つの狙いだったと考えられます。家臣たちは、藩主の「御前」で立派に試技を披露できれば、藩主の覚えがめでたくなり、場合によっては立身する糸口に



「上覧仕法改」  
毛利家文庫7格式12

宝暦改革を推進した毛利重就は、家臣の教育にも力を注ぎました。

文武に熱心に取り組む者、あるいは自身だけでなく周囲に影響を与えている者を積極的に賞美しました。

その一方で、藩主上覧の弊書を一掃しようとしたようです。

なる可能性もあります。

それゆえ、個々の家臣は、気合いを入れて日々の稽古に取り組み、師匠に推挙をされて「御前」でその技量を披露したいと思ったことでしょう。

### 《上覧兵法》

ところが、次第に本来の趣旨とは、ズレてしまっていたようです。

藩主上覧には、師匠から選ばれた家臣が臨むため、選抜されなかった家臣たちの多くは、怠惰に過ぎて稽古に励まず、また選抜された者も上覧の日が近づくまで真面目に稽古しなかったようです。選抜された家臣は、もともと技量が人より優れているから師匠から推挙されたわけで、しばらく手を抜いても本番直前に少し稽古すれば大丈夫と判断してのことだと思えます。こうした処し方を、当時、「上覧兵法」と呼んだようです（冒頭の史料）。

生徒・学生が一夜漬けで試験に臨むようなもので、日々の努力はせず、付け焼刃よろしく上覧日が間近に

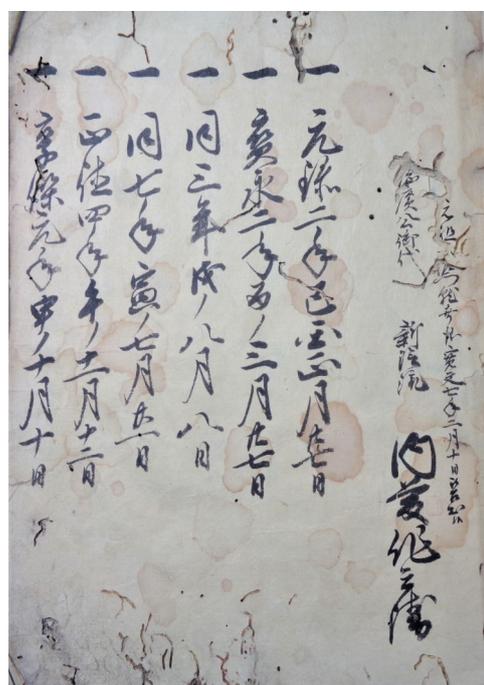
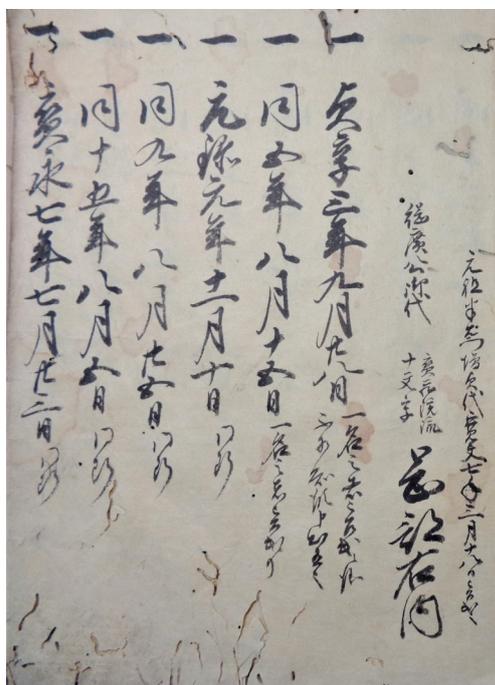
迫ってきてから稽古していたようです。平素から地道に稽古・鍛錬してこそ、諸芸は身に付き、極められると思うのですが……。

### 《麿具・麿服にても》

こうした状況を、藩主や藩の上層部は嘆かわしいと思ったのでしょう。藩は上覧の実施方法を改定します。宝暦10年（1760）のことでした。「人差を以前後之次第に不被拘、差掛り俄之御沙汰二而抜々可被召出との御事候」と、選ばれた20人全員が披露するのではなく、「人差」（指名）をうけた者が披露する。また日時を定めず、「俄の」沙汰で召し出して武芸を披露させることとしました。

日程を急遽知らせるため、「如何程麿具・麿服にても不苦候」つまり粗末な武具・服装でも構わないとしています（毛利家文庫7格式12「上覧仕法改」）。

誰がいつ何時、武芸披露の指名を受けるかわからないという状況にして、藩士に緊張感を持たせるようにしたのです。果たして藩の目論見は、成功したのでしょうか。



「諸芸上覧年月日寄書」（毛利家文庫7文武118）

右は新陰流の内藤作兵衛、左は宝蔵院流十文字鑑の岡部右内からの報告。岡部の方には、人数の記載も。